

学校感染症と出席停止期間の基準

《学校保健安全法施行規則第18、19条（2023年5月時点）》

学校感染症にはそれぞれ出席停止の期間が定められている。この期間は医師の指示に従って休養するとともに、周囲への感染予防を配慮する。

	考え方	感染症の種類	出席停止期間の基準
第一種	感染症予防法の一類感染症及び二類感染症（結核を除く）	エボラ出血熱、クリミア・コンゴ出血熱、痘そう、南米出血熱、ペスト、マールブルグ病、ラッサ熱、急性灰白髄炎、ジフテリア、重症急性呼吸器症候群（病原体がコロナウイルス属SARSコロナウイルスであるものに限る）、中東呼吸器症候群（病原体がベータコロナウイルス属MERSコロナウイルスであるものに限る）、特定鳥インフルエンザ（感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律（平成十年法律第百十四号）第六条第三項第六号に規定する特定鳥インフルエンザをいう）、新型コロナウイルス感染症	<p>治癒するまで</p> <p>※感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律第六条第七項から九項までに規定する「新型インフルエンザ等感染症」、「指定感染症」及び「新感染症」は第一種の感染症と見なす。</p>
		<p>空気感染または、飛沫感染する感染症で児童生徒の罹患が多く、学校において流行を広げる可能性の高いもの</p> <p>インフルエンザ（特定鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザを除く）</p> <p>百日咳</p> <p>麻疹</p> <p>流行性耳下腺炎</p> <p>風しん</p> <p>水痘</p> <p>咽頭結膜熱</p> <p>新型コロナウイルス感染症（病原体がベータコロナウイルス属のコロナウイルス（令和二年一月に、中華人民共和国から世界保健機関に対して、人に感染する能力を有することが新たに報告されたものに限る。）であるものに限る。）</p> <p>結核</p> <p>髄膜炎 菌性髄膜炎</p>	<p>発症した後5日を経過し、かつ解熱後2日（幼児にあっては3日）を経過するまで</p> <p>特有の咳が消失するまで、又は5日間の適正な抗菌薬療法による治療が終了するまで</p> <p>解熱した後3日を経過するまで</p> <p>耳下腺、顎下腺又は舌下腺の腫張が発現した後5日を経過、かつ、全身状態が良好になるまで</p> <p>発しんが消失するまで</p> <p>全ての発しんがかさぶたになるまで</p> <p>主要症状が消退した後2日を経過するまで</p> <p>発症した後5日を経過し、かつ、症状が軽快した後1日を経過するまで</p> <p>病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで</p> <p>症状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで</p>
第三種	学校において流行を広げる可能性があるもの	コレラ、細菌性赤痢、腸管出血性大腸菌感染症、腸チフス、パラチフス、流行性角結膜炎、急性出血性結膜炎	病状により学校医その他の医師において感染のおそれがないと認めるまで
	条件によっては出席停止の措置が考えられるもの	その他の感染症 （溶連菌感染症、A型肝炎、B型肝炎、手足口病、伝染性紅斑、ヘルパンギーナ、マイコプラズマ感染症、感染性胃腸炎など）	学校で通常見られないような重大な流行が起こった場合に、その感染拡大を防ぐために、必要があるときに限り学校医の判断を聞き、校長が第三種の感染症として緊急的に措置を取ることができる。